

令和元年6月19日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04357

研究課題名(和文)小学生における無気力感改善のための教師・保護者介入プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a Teacher/Guardian Intervention Program for Alleviating Helplessness among Elementary School Students

研究代表者

牧 郁子(MAKI, IKUKO)

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：70434545

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：研究1で子どもの感情の社会化を促進する保護者・教師用のプログラムを作成し実施した。その結果、保護者においてはワークショップ形式の実施に戸惑いが認められ、教員への実施では時間的制約のためワークショップ部分の実施が十分できなかった。以上を勘案して、研究2では啓発型リーフレット(学校編・家庭編)を作成し、教師を対象にその内容に関わるアンケートを実施したところ、概ね肯定的な評価を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

(1) 児童期の無気力感のメカニズムを、認知発達のみならず情動発達も考慮して構築する本研究は、国内外の児童期の抑うつ・無気力感の予防研究に、新たな視座を与えようとする。(2) 本研究で開発したプログラムは、大人の関わりがその情動・認知発達に影響を与える児童期の特徴を踏まえ、教員・保護者への研修・講演を前提としているため、子どもの発達段階に合致した援助を提供できると考える。(3) 本研究で開発したプログラムは、小学生の無気力感研究を土台に、教員養成課程の学生・教員・保護者に試験的に実施しながら開発したため、実証研究に基づきながらも簡便に実施できる援助方法を、広く一般に還元できると考える。

研究成果の概要(英文)：In Study 1, a program was created and implemented for teachers/guardians to promote the socialization of the children's emotions. Consequently, it was recognized that the implementation of the workshop format caused disorientation among guardians, while the workshop was not fully implemented by teachers due to time constraint. With the above in mind, in Study 2, an educational leaflet was created (in the school edition/in the home edition), and a survey was conducted with teachers regarding the contents of the leaflet, which generally received positive evaluations.

研究分野：学校臨床心理学

キーワード：小学生 無気力感 保護者 教師 介入

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

平成 27 年度までの研究

小中学生を対象とした調査結果で、日本の子どもは欧米の子どもよりも抑うつ得点が高いことが報告され(傳田, 2004), 子どもの抑うつは学校臨床心理学において看過できない課題となっている。こうした子どもの抑うつの予防として牧(2015a, 2015b)は科学研究費・基盤研究(C)「小学生における無気力感メカニズムと教師介入プログラムの検討」(課題番号 25380927)の助成を受けて、その前段階としての「小学生の無気力感」に着目し、小学生の無気力感の構成要因の同定とその変数尺度の作成, および作成した尺度に基づく小学生の無気力感モデルの検証を試みた。具体的には、小学生の無気力感の構成要因として、牧ら(2003, 2006, 2007, 2011)により、中学生の無気力感の構成要因として確認されている随伴性認知(随伴経験・非随伴経験)・コーピングエフィカシー・思考の偏りといった変数に、子どもの親との感情交流といった新たな変数を加え検討を行った。なおこの変数は、感情の社会化と抑うつとの関連性を示唆する研究(Greenberg, 2010)・子どもの感情の社会化と心理的不適応の関連性を示唆する知見(大河原, 2004)・児童期の子どもの情動認知発達に関する知見(井原, 1994; 中村, 2016)に基づき同定した。続いて同定された変数の測定尺度を開発したうえで、モデル検証を行った。その結果、親との感情交流が子どもの考え方(コーピングエフィカシー・思考の偏り)を媒介して経験の認知に影響を与え、無気力感につながる可能性が示唆された。

先行研究を踏まえた本研究における課題

平成 27 年度までの「小学生における無気力感メカニズムと教師介入プログラムの検討」(課題番号 25380927)を踏まえ、以下の課題があると考えられた。

(1) 介入の効果検討の必要性

平成 27 年度までの研究では、量的研究結果に基づいて「教師介入プログラム」を作成することが目的であった。検討の結果、研究結果の報告とその結果に基づく子どもの無気力感改善に必要と考えられる対処方法のポイントを冊子にまとめ、協力校へ配布することができた。また感情の社会化不全の子どもへの具体的介入方法に関するテキスト「体のことばに耳をすます気持ちイメージワーク」冊子も併せて作成し、現場教員および保護者へも配布した。しかし当該年度に協力校の教員が児童保護者対応で多忙であったため、冊子に基づく研修と効果検討が実施できなかった。以上から本研究では、平成 27 年度までの研究を土台に改訂した小学生の無気力感改善のためのプログラムの効果検討を行う必要がある。

(2) 介入プログラム対象拡大の必要性

平成 27 年度までの研究において小学校教員から、保護者への介入必要性が指摘された。また平成 27 年度までの研究結果でも、保護者との感情交流が児童の考え方・経験の認知を媒介して無気力感に影響を与えている可能性が示唆された。さらに家庭での感情の社会化は児童期の子どもの心理的適応の土台となる(大河原, 2004, 2015)ことも踏まえると、子どもの感情の社会化で補完的役割を果たす教員のみならず、その直接的役割を担う保護者へも介入プログラムの対象を広げることは、無気力感の対処のみならず予防的観点からも必要と考える。

2. 研究の目的

そこで本研究では、「小学生における無気力感改善のための教師・保護者介入プログラム」を開発し、プログラムの実施・効果検討を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

【研究 1】小学生における無気力感改善のための教師・保護者介入プログラムの開発

教師・保護者を対象とした介入プログラム原案作成のため、前回の基盤研究(C)「小学生における無気力感メカニズムと教師介入プログラムの検討」(課題番号 25380927)で得られた知見に関する詳細な考察を、国内外の文献研究に基づき行った。その上で、介入理論および方法に関わる国内外の文献研究を行い、介入プログラムの原案を作成した。

【研究 2】小学生における無気力感改善のための教師・保護者介入プログラムの効果検討

(1) 小学生における無気力感改善のための教師・保護者用プログラムの実践

2-1-1 小学生における無気力感改善のための保護者用プログラムの実践

< 調査対象 >

大阪府内の公立中学校で行われた保護者向けの講演に参加した、小学校・中学校・高校に子どもを通わせる保護者 16 名

< 手続き >

ワークショップ形式のプログラム「子どもの気持ちに耳をすます・保護者用」を実施し、調査を行った。調査は無記名式で実施され、講演実施者(研究責任者)によって教示・配布・回収された。調査は、Q1 子どもの学年・Q2 ワーク内容(1=役立たなかった, 2=役に立った, 3=とても役に立った, 4=その他)・Q3 ワークのわかりやすさ(1=わかりにくかった, 2=わかりやすかった, 3=とてもわかりやすかった, 4=その他)について回答を求めた。なお少数の保護者対象の講演会という性質上、保護者の年齢・性別に関しては、個人が特定される懸念を排除するため、設問を設けなかった。

2-1-2 小学生における無気力感改善のための教師用プログラムの実践

< 調査対象 >

大阪府内で行われた教員研修に参加した，小学校・中学校教員約 70 名

< 手続き >

心理教育（児童期の認知情動発達，感情の社会化不全に関わる児童期の諸問題，保護者との情動交流と無気力感との関係）と，ワークショップ（子どもの気持ちを，代わって言葉で表現する）課題を中心とした，パワーポイントによる教示・ワークシートによる振り返り・ロールプレイングによるシェアリング）「子どもの気持ちに耳を澄ます・教師用」を教員研修で実施した。但し時間的制約の関係で，については，パワーポイントによる対応の実際に関わる解説のみ行った。

(2) 啓発型リーフレット「子どもの心のエネルギーをふやす大人の関わり（学校編・家庭編）」の作成と実践

< 分析対象 >

大阪府内の夜間大学院に通う，現職小学校教員大学院生 5 名

< 手続き >

大学院の授業において，子どもの情動の社会化に関わる講義を行い，その補足資料とし啓発型リーフレット「子どもの心のエネルギーをふやす大人の関わり（学校編）」「子どもの心のエネルギーをふやす大人の関わり（家庭編）」を配布し，その評価に関わるアンケートへの回答を依頼した。具体的には，「Q1 リーフレットの内容について，当てはまる番号に をおつけください」と教示し，4 件法（ 実際に役立つと思う， 参考にはなると思う， あまり役立つなと思う， その他）で回答を求めた。また「Q2 リーフレットのわかりやすさについて，当てはまる番号に をおつけください」と教示し，4 件法（ 全体的にわかりやすいと思う， わかりやすい箇所とわかりにくい箇所がある， 全体的にわかりにくいと思う， その他）で回答を求めた。

4. 研究成果

【研究 1】小学生における無気力感改善のための教師・保護者介入プログラムの開発

文献研究による無気力感改善のための教師・保護者介入方法の検討

本年度は保護者を対象とした介入プログラム原案作成のため，前回の基盤研究（C）「小学生における無気力感メカニズムと教師介入プログラムの検討」（課題番号 25380927）で得られた知見に関する詳細な考察を，国内外の文献研究に基づき行った。その上で，介入理論および方法に関わる国内外の文献研究を行った。

前回の研究知見から，ネガティブ情動を保護者に送信できる子どもが，必ずしも保護者に聴いてもらえているとは限らない可能性が示唆された。保護者のメタ情動と子どもの情動制御能力（Gottman, Katz, & Hooven, 1997）・子どもの感情に関する会話（Gottman, 1997）との関連性が示されていること，また大人はネガティブ感情には否定的であること（大河原, 2015）から，子どもがネガティブ情動を表現しても保護者が受けとめられるケースとそうでないケースとがある可能性が考えられた。以上から，主にネガティブ情動に関する保護者介入の必要性が示唆された。また愛着理論（Hoffman, Marvin, Cooper, & Powell 2006），精神分析（Winnicott, 1959, 1963）から，子どもの感情表出への保護者の対応が情動発達に影響することが示唆され，保護者介入の妥当性が確認された。さらに本研究では児童期の感情表出の環境として保護者を想定していることから，「情動表出する機会」（Kennedy-Moore & Watson, 1999）への介入と定義された。そして子どもの情動表出の機会を保証するために，保護者の子どもの情動への気づき，子どもの情動の言語化支援，子どもの情動への共感と承認（Gottman et al., 1997）を促進するプログラムの必要性が示唆された。

以上を踏まえ，保護者の子どもの情動への気づき，子どもの情動の言語化支援，子どもの情動への共感と承認（Gottman et al., 1997）を促進するプログラムとして，Faber & Mazlish (2012) のワークショップ形式プログラムの援用が適当であるとの判断に至った。そこで，Faber & Mazlish (2012) を参考にプログラムの開発を行うこととした。

文献研究に基づく無気力感改善のための教師・保護者介入プログラムの検討

1. 小学生における無気力感改善のための保護者用プログラムの開発

当初，心理教育，ワークシート形式の研修を想定していたが，保護者の理解力のばらつきを踏まえ，ワークショップを中心に据えたプログラムを開発した。具体的には Faber & Mazlish (2012) による 4 つの子どもの気持ちを尊重する聞き方のうち，日本の保護者が実践しやすいと判断された「子どもの気持ちを代わって言葉で表現する」を中心に，パワーポイントによる教示・ワークシートによる振り返り・ロールプレイングによるシェアリングを併用した，ワークショップ形式のプログラム「子どもの気持ちに耳を澄ます・保護者用」原案を作成した。

2. 小学生における無気力感改善のための教師用プログラムの開発

勤務校における学部教育や，現職教員を対象とした夜間大学院での授業実践を通じて，プログラム案の試行を行った。その結果，心理教育（児童期の認知情動発達，感情の社会化不全に関わる児童期の諸問題，保護者との情動交流と無気力感との関係）と，ワーク

シヨップ(「子どもの気持ちを、代わって言葉で表現する」課題を中心とした、パワーポイントによる教示・ワークシートによる振り返り・ロールプレイングによるシェアリング)から構成される「子どもの気持ちに耳を澄ます・教師用」原案を作成した。

【研究2】小学生における無気力感改善のための教師・保護者介入プログラムの効果検討

(1) 小学生における無気力感改善のための教師・保護者用プログラムの実践

子どもの情動表出の機会を保障するための、子どもの情動への気づき、子どもの情動の言語化支援、子どもの情動への共感と承認(Gottman et al., 1997)を促進するプログラムとして、Faber & Mazlish (2012)における、保護者対象のワークショップ形式プログラムを援用した、ワークショップ型の「小学生における無気力感改善のための教師・保護者介入プログラムの開発」を作成し、以下の実践を行った。

2-1-1 小学生における無気力感改善のための保護者用プログラムの実践

Faber & Mazlish (2012)による4つの子どもの気持ちを尊重する聞き方のうち、日本の保護者が実践しやすいと判断された「子どもの気持ちを代わって言葉で表現する」を中心に、パワーポイントによる教示・ワークシートによる振り返り・ロールプレイングによるシェアリングを併用した、ワークショップ形式のプログラム「子どもの気持ちに耳をすます・保護者用」を、学齢期の子どもを持つ保護者を対象とした講演会で試験的に実施し、その感想についてアンケート調査を行った。その結果、内容に関しては概ね「とても役に立った」「役に立った」といった結果となり(Fig.1)、わかりやすさに関しても概ね、「とてもわかりやすかった」「わかりやすかった」といった結果となった(Fig.2)。しかしワークショップにおいて、ロールプレイングを行ったことのない参加者が多く、ペアでの実施において戸惑う様子が認められた。Faber & Mazlish (2012)など、海外では数多くの保護者向けワークショップが実施されているが、わが国においてはワークショップそのものの普及が十分でなく、日本の一般的保護者にとっては、有効でない可能性が考えられた。

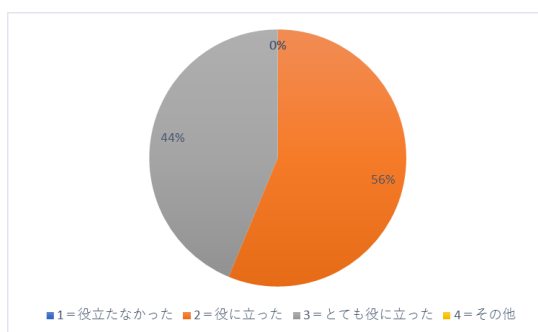


Fig.1 ワーク内容評価結果

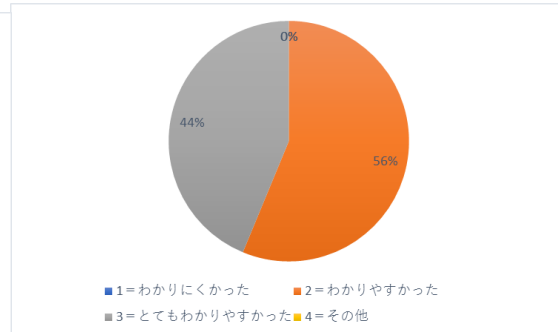


Fig.2 ワークのわかりやすさ評価結果

2-1-2 小学生における無気力感改善のための教師用プログラムの実践

心理教育：子どもの情動発達に関わる先行知見(井原, 1994; 牧, 印刷中; 大河原, 2004)に基づき作成(児童期の認知情動発達, 感情の社会化不全に関わる児童期の諸問題, 保護者との情動交流と無気力感との関係)と, ワークシヨップ:Faber & Mazlish (2012)に基づき作成(子どもの気持ちを、代わって言葉で表現する)課題を中心とした、パワーポイントによる教示・ワークシートによる振り返り・ロールプレイングによるシェアリング)から構成される「子どもの気持ちに耳を澄ます・教師用」を作成し、小学校教諭も含む教員研修にて試験的に実施した。なお限られた時間内での実施であったことから、当該実践では、「子どもの気持ちを引き出す聴き方」と題し、教師と子どものやり取りにおけるNG場面とOK場面をイラストで再現したものを提示した。その結果、研修の感想として、の心理教育に関わり、関わっている子どもを思い浮かべながら聞いた・理論が腑に落ちたなどの感想を得た。またの「子どもの気持ちを引き出す聴き方」についても、早速実践で試してみたい等の感想が得られた。

(2) 啓発型リーフレット「子どもの心のエネルギーをふやす大人の関わり(学校編・家庭編)」の作成と実践

先の「保護者用プログラムの実践」において、ワークショップ形式に馴染みがない本邦の保護者には、ロールプレイングが必ずしも有効でない可能性が示唆された。また研究1の「教師用プログラムの実践」において、教員研修という都合上、ワークショップを「子どもの気持ちを引き出す聴き方」に関わる視覚的情報提供に変えて実施したところ、一定の評価を得られた。以上から本研究では、心理教育とワークショップで構成されていたプログラム内容の汎用性・頒布性を考慮して、に代わる教師向け・保護者向けの啓発型リーフレットを作成した。そして小学校・中学校の現職教員・教員経験者の履修する夜間大学院における授業内で頒布し、内容に関わるアンケート調査を実施した。そして小学校での勤務経験のある5名のデータに関して分析し、以下の結果が得られた。

「学校編」の内容に関しては、概ね「実際役に立つと思う」「参考にはなると思う」という回

答が得られたが (Fig.3), わかりやすさに関しては, 「全体的にわかりやすいと思う」が多かったものの, 「わかりやすい箇所とわかりにくい箇所がある」「全体的にわかりにくいと思う」といった指摘もあった (Fig.4)。また本リーフレットに関する意見では「より多くの事例を掲載してほしい」との要望があった。

一方「家庭編」の内容に関しては, 概ね「実際に役立つと思う」「参考にはなると思う」という回答が得られたが (Fig.5), 「あまり役立たないと思う」といった回答もあった。また「家庭編」のわかりやすさに関しては, 「全体的にわかりやすいと思う」が過半数であったものの, 「わかりやすい箇所とわかりにくい箇所がある」「全体的にわかりにくいと思う」といった指摘もあった (Fig.6)。また本リーフレットに関しては「情報量が少ないので, もっと事例を掲載してほしい」「OKの好事例はケースによるので, 役立てるのが難しいかもしれない」「NGの事例を掲載した方が (保護者行動への) ストッパーになるのでは」との意見があった。

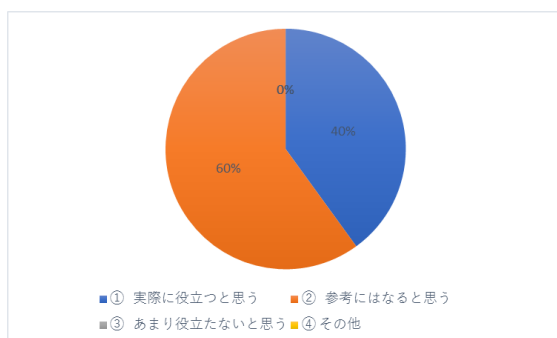


Fig.3 リーフレット (学校編) 内容評価結果

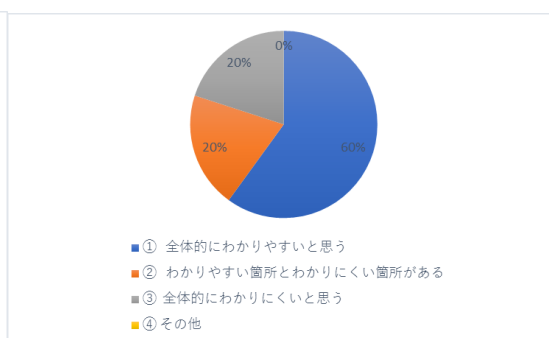


Fig.4 リーフレット (学校編) わかりやすさ評価結果

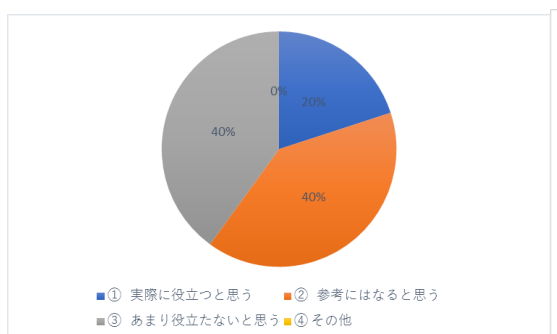


Fig.5 リーフレット (家庭編) 内容評価結果

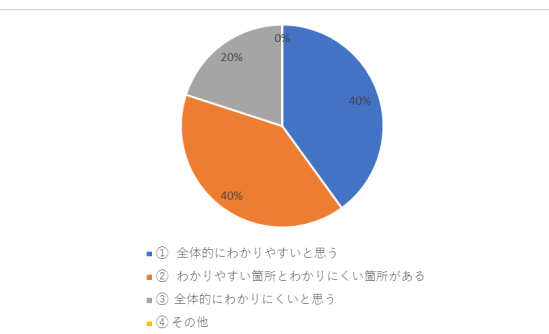


Fig.6 リーフレット (家庭編) わかりやすさ評価結果

以上, 研究1・研究2の結果から, 「小学生の無気力感改善のための教師・保護者介入プログラムの開発」は, 概ねその内容・実施方法に関して肯定的な結果が得られたものの, 要改善点も散見される結果となった。

具体的には教師向けにおいては, 時間的制約を鑑みると, 心理教育とワークショップの二部構成実施は難しいことから, ワークショップ形式に替えて, 研究2で作成したリーフレットによる, 具体的な対応例の提示と解説にするなどの構成の変更が有効であると考えられる。一方保護者向けの介入プログラムでは, ワークショップの経験が殆どない保護者が多く, 実施自体に課題が認められたことから, 教師向け同様に, 心理教育, リーフレットによる具体的な対応例の構成に変更するなどの必要性が示唆された。

本研究の結果, 教師向け・保護者向けプログラムの見直しが示唆されたことから, 児童の無気力感に関わる効果検討を見送った。今後は本研究で示唆された問題点を改善した教師・保護者対象のプログラムを作成し, 改めてその効果検討を行う必要があると考える。

引用文献

- 傳田健三 (2004). 子どものうつ 心の叫び 講談社.
- Faber, A., & Mazlish, E. (2012). How to Talk so Kids Will Listen and Listen so Kids Will Talk. Piccadilly Press. (フェイバ, A.・マズリッシュ, E. 三津乃・リーディ・中野早苗 (共訳) 子どもが聴いてくれる話し方と子どもが話してくれる聴き方大全 きこ書房)
- Gottman, J. M. (1997). The heart of parenting: How to raise an emotionally intelligent child. New York: Simon & Schuster.
- Gottman, J. M., Kayz, L. F., & Hooven, C (1997). Meta-emotion: How families communicate

- Emotionally. New York: Routledge.
- Hoffman, K. T., Marvin, R. S., Cooper, G. & Powell, B. (2006). Changing toddlers' and preschoolers' attachment classifications: the circle of security intervention. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 74(6), 1017-1026. doi:10.1037/0022-006X.74.6.1017
- 井原成男 (1994). 心のケア 子ども相談の実際 心の基礎づくりから育て直しへ 日本小児医事出版社
- 大河原美以 (2004). 怒りをコントロールできない子の理解と援助 金子書房
- 大河原美以 (2015). 子どもの感情コントロールと心理臨床 日本評論社
- 牧 郁子 (2015a). 児童用・感情交流尺度作成の試み 信頼性・妥当性の検討 日本教育心理学会第 57 回総会 (新潟大学), 日本教育心理学会総会発表論文集 (57).
- 牧 郁子 (2015b). 小学生における無気力感モデル検討の試み 保護者との感情交流を加えた検討 日本心理学会第 79 回大会 (名古屋大学), 日本心理学会第 78 回大会発表論文集, 307.
- 牧 郁子 (印刷中). 保護者との情動交流が小学生の無気力感に与える影響 構造方程式モデルによる分析 教育心理学研究, 67.
- Winnicott, D. W. (1959). Classification: Is there a psycho-analytic contribution to psychiatric classification? in *The Maturation processes and the facilitating environment*, pp124-139. London: Hogarth, 1965.
- Winnicott, D. W. (1963). Communicating and not communicating leading to a study of certain opposites. in *The Maturation Processes and the Facilitating Environment*, pp179-192. London: Hogarth, 1965

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

牧 郁子 (印刷中). 保護者との情動交流が小学生の無気力感に与える影響 構造方程式モデルによる分析 教育心理学研究, 67. (査読あり)

〔学会発表〕(計 5 件)

牧 郁子 保護者との情動交流が小学生の無気力感に与える影響回答パターンからの検討 平成 30 年 9 月日本教育心理学会第 60 回総会発表論文集 (慶應義塾大学), 日本教育心理学会総会 発表論文集 (485).

牧 郁子 小学生における無気力感メカニズムの検討 性別データによる検討 平成 29 年 9 月 日本心理学会第 81 回大会 (久留米大学), 日本心理学会第 81 回大会発表論文集, 7

牧 郁子 小学生における無気力感メカニズムの検討 学年別データによる検討 平成 29 年 10 月日本教育心理学会第 59 回総会発表論文集 (名古屋大学), 日本教育心理学会総会発表論文集 (339).

牧 郁子 小学生における無気力感モデル検討の試み (2) 保護者との感情交流を加えた検討 平成 28 年 11 月 日本健康心理学会第 29 回大会 (岡山大学), 日本健康心理学会第 29 回大会発表論文集, 75.

牧 郁子 児童用・感情交流尺度作成の試み (2) 信頼性・妥当性の再検証 平成 28 年 10 月日本教育心理学会第 58 回総会 (香川大学), 日本教育心理学会総会発表論文集 (294).

〔図書〕(計 1 件)

牧 郁子 (2018). 職員室の人間関係 大久保智生・牧郁子 (編) 教師として考えつづけるための教育心理学 第 4 部・第 1 章 (pp.98-102) ナカニシヤ出版

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

特記事項なし

6. 研究組織

(1) 研究分担者 なし

研究分担者氏名:

(2) 研究協力者 なし

科研究による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。